
異世界に戻ろう

ゆうた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界に戻るつ

【著者名】

ゆうた

N5370X

【あらすじ】

異世界の住人との出会い

魔法を習得

その他諸々

人生に落胆してみた。（前書き）

この小説は初投稿です。
誤字脱字・間違いがあれば言つてください
すぐに修正いたします

人生に落胆してみた。

「はあ・・・」

「光」ウタは思わずため息をついた

「なんでこんなにつまらないんだ・・・」う・・・人生が」

インターネットもやりこみすぎて飽き

スポーツ万能 成績不優秀 性格は良く友達も多い典型的なイケイ
ケ男子

多少モテる（彼女はいない）

2月9日

「ふう〜・・・」

「どうしたの？」

「ウタのため息に級友の志田 コウヘイが話しかけてくる

「いや・・・まあ ネットゲーム飽きたし

「マンガ飽きたし何すればいいかわからないや

「なんで？ モテるんだから 彼女の一人くらい作って遊べば？」

「そんな女の子の使い方は絶対にしねえ」

「ふう～ん・・・まあ好きじろりて」

「あつ言って教室から出て行った

「あこつもここりとひまつな」

人生に落胆してみた。（後書き）

この小説は初投稿です。
誤字脱字・間違いがあれば言つてください
すぐに修正いたします

部活に出てみた。

学校終わったし 放課後は部活かあ・・・
だるいな 僕あの鬼教師が顧問だからな
出なかつたら 反省文だしな
いちいち書かすなつての
好きなサッカーやつてるんだし
文句は言わないでおいつ
最近1年なのに試合にも出てるし
練習は用事以外欠かしてないし
家にて
ハア 風呂はいりつと
「そろそろ飯だな・・・ネットしようかな」
とそのとき廊下でとてつもない光に包まれた
「...なんだ!?」「おおおおおおおお

地面が光に包まれよく見えない

そのまま地面に

引き込まれ気を失つてしまつた・・・

部活動でみた。（後書き）

中学生なので投稿が不定期になるかと思いますが
よろしくお願いします

異世界に強制送還されたみた。

「……」

「……誰……？」

見るど赤いようなパンクつぽこ髪をした女の子がロープを着て

「つかをまじめじと見ていろ

「こつかのじこた！返答次第では拘束して王宮に……」

「つてこつかのじだ？」

「返事をしろ…………」

「スマソスマソ」「そんで俺は光ノウタ　お前は？」

「お前にお前と呼ばれたくはないッ」「……私の名前はスレイトよ……」

ちゃんと答えてくれたようだ

「それでこひせどい？」

「こひちの質問に答える……でも……私を知らないなら悪ひは
しなさそづね」

「だからこひせどいなんだ」

「ここはエリニア王国・ウェンタル山の標高・・・600程度よ

「・・・？」

社会は地理だけでも勉強しくんだったー

「この山は私の親の私有地よ 地図に名前は出ない

「俺の心を・・・読めるのか？」

「心の念がもれていたわ あなた魔法使いでもなさそうね・・・ハ
ア」

「ま・・・魔法使い！？」

「知らないの？あなた本当にどこから来たのよ

「え？俺は日本の東京から」

「どうよそこ

「え？」

「そんな地名聞いたことないわ やっぱり拘束して

「待った！ 俺さっきまで俺の家の俺の部屋にいたんだけど

「ハア？ 転送されてきたって訳？ 誰から？なんで？ ここは侵入者が来ないように魔法で守られているのに

「転・・・送・・・だつて? そんなことお前等には出来るのか?
?」

「ええ・・・でも使う人と使われる人の了承を得なくちゃならない
制約の厳しい魔法よ」

「ふ〜ん 僕の世界にはそんなの聞いたこと也有ねえや」

「あなた日本つてどこの星にあるの?」

「JUJUは・・・JUJUの星じゃ日本が無いー!?

JUJUは地球じゃないのかー?」

星系について話しかけてみた。

「リリは地球じゃなーのか」

「チキコウ・・・? なにそれ?」

「リリの惑星知り何ついでだ?」

「シコウフルシリ星」「アンドロメダ星系の惑星よ」

「・・・」

理科は好きなの? まだよくわから……絶望してみた

アンドロメダ星系は地球のある

銀河系のひとつもなく遠い星系で

光の速さで300万年位つてこいつ距離にある

この惑星の文化がどれだけ

発達していくも魔法に頼つてこるような惑星に

地球のロケット並のスピードは出せないのでは……

と頭の中で考えがめぐらしきつた

「それで？あなたの言ひ分ではアンドロメダ星系ではない惑星からきたみたいね」

「ああ・・・銀河系の惑星だ」

「ギンガケイ・・・？」アンドロメダ星系とちかくのトールラント星系以外に

星系があるなんて 夢にも思わなかつたわ」

なんてこいつた――

銀河系の存在も確認できないとは・・・

つていう事は今にも俺の惑星のみんなが心配してゐる事とか？

「あなた本当にこの転送に見覚えが無いの？」

「心を読むな あるわけ無いだろ」

「あら なんで心を読んだと思つたのかしい」

「俺には・・・お前が心に侵入しているのが感じ取れる」

「・・・あなた本当に・・・魔法使いじゃないのよね」

「もつお前の魔法の耐性はついたみたいだ」

「やつ・・・成長は・・・早すぎぬ・・・わね」

その瞬間俺は視界が消えまた氣絶してしまったようだ。

星系について話しかけてみた。（後書き）

ちなみにアンドロメダ星系は存在しますが
デルラント星系は存在しません
小説内での地名・場所です ご了承ください

スレイトの事情をかいつまんでみた。

次起きたときには

「ノーナー・・・?」

「私の家よ」

「俺は・・・?」

「気絶したの」

「お前は・・・スレイト・・・か」

そのとき 電が勢いよく開いた

音が部屋中に響く

「おうなよウ・・・やれこます・・・?」

「なんで疑問符になるのよつ

「いや・・・あの?」

「(ソラに寝てるのは)カウタだそつよ」

「よ・・・よれじべ」

「私はスレイト様のいるドムントライア家の仕えるメイド
レンテルです 以後お見知りおきを」

礼儀は正しくて立派な子だ

背は俺と少し低いからで

年上って感じかな

若くしてよく働くよ・・・って

「スレイト・・・心読むなって」

「すいわね もつこんなに感知できるようになったの?..」

「まあな 感知するものは仕方ねえよ」

「あのー私はなにをすればよろしいですか?..」

「とうあえず3階の部屋を掃除それから
洗濯 曜食 送迎 2階の掃除 送迎 晩御飯つてとにかくしら

「かしこまりました」

「おこ・・・そんなに仕事押し付けていいのか?..」

「いいんです 仕えている身ですし これでも少ないほうなのです

よ?..」

「上級の身分になつたら仕事の量はこんなんじゃないわ そりそり

私たちも動くわよ」ウタ

「え?何を

?..」

魔術学校に見学してみてみた。

「エリ行くんだよ」

「//ーストア・ランテル・カームアル学校よ」

「長いな・・・作者も覚えてられないだろ」

「作者は関係ないの さあ行きましょう 今は冬期休暇中よ」

「冬休みって・・・この世界の暦ってどうなってるんだ?」

「暦・・・? この世界の人じゃないからあなたはわからないか
1年が一番ながい単位になるわ」

「地球と同じじゃねえか」

「それで1年は500日10ヶ月構成よ 1月50日よ」

「ふう〜ん 長いんだな」

「地球と違うの?」

「うん 地球は1年が」

20分後

「つて感じかな」

「説明下手ね」

「う・・・うるさいだよ」

「そろそろ着くわよ」

「結構あるこたな」

「ええ私の家は家から出るまでが長いから」

「ふむふむ 私有地はでかいと血縁したかったのか
「血縁じゃないわよ」

「うーん・・・お前に心を読ませなくしたいんだが・・・」

「魔法使いの上位の人でも無理よ」

「なんでだ?」

「Uの“解心術”自体が特別な家系でないと扱えないのよ

「へえー・・・お前の家系は特別なのか?」

「そうよ 王族系の血をひいているわ

「ー? Uのでかい建物は?」

「Uがカームアル学校よ あなた魔法留つてみる?」

「え?」

学校に入学しようか迷つてみた。

「随分つって入学するつてこと?」

「そうよ」

「身分も肩書きも住所もなにもないのに?」

「本当になにも知らないのね 他の星から転送された人は身分と肩書きをもらえるのよ」

「? 僕・・・地球の存在もわからないつてのに・・・?」

「地球は実在するみたいね 300年ほど前の転送者身分発行履歴に地球からきた人物の身分発行がされていたわ」

「そうか・・・んじゃ俺も身分発行できるんだな」

「理解が早くて助かるわ そうよそれで私が今朝王宮に行つてきて発行してもらつたわ」

「と言いながらなんか身分証明書的な紙を渡してくる いつも思つていたが終始無表情だ

「あ・・・ありがと」

「わかつたら一日帰つてもうつわよ」

「・・・は?」

「学校に入つたら少なくとも500円はいるにしてもいいことになるわ

あなたの独断で決定するわけにはいかないわ」

あれ・・・少し表情が「寂しい」を語っている つて

「あなた・・・私がそんなことを思つてると思つてるの?」

「あなたなんか一度と帰つてこなくていいわよつ

杖的なから雷・氷・炎が噴き出した 僕を見据えて直撃したみたいだ
もしかすると気絶してしまつた

「ん・・・」は

「やつと起きたみたいね」

スレイトが少し赤い顔でこっちを覗き込んでくる

周りには成人男性らしき人が5~6人取り囲んでいる

「コウタ・・・君だったね 君が言つたことは本当だつたんだな」

「誰・・・ですか?」

「スレイトの父つてところだ ここにいる上位魔法使いの転送で一度帰つてもうつ」

「転送つてこんなに人数要るんですか? 僕が来たときは誰もいませんでしたけど」

「そうか その魔法使いは相当高等な人物だな それだけで大体特定できる」「そうですか」

「それでは 転送前に儀式を行つ

男性たちが前に出てきた

「心開きの儀からだ」

儀式を開始してみた。

「心開きの儀を開始する」

そういつたとたんなにか呪文を唱え始めた。

俺には理解不能だが英語っぽいことを言つてゐみたいだ

唱え終えたとたん地面が光を発した

いきなりだつたので目が眩む

「コウタ君　ここにいる全員に心を許すんだ」

「どうすればいいですか？」

「この人たちの名前を思い浮かべるんだ」

「名前？　知らないですよ　初対面なんですし」

「それでこの人がアルベル・コールだ」

「わかりました　全員名前を覚えました」

地面は光つたままだ

「よしこれで一旦は大丈夫だ」

そういつた瞬間　光は消えた

「それでは “身転送の儀” に移る」

またスレイトのお父さん・デルランテッドさんが呪文みたいなのを唱え始めた

ちなみにデルラント星系の英雄だそ�だ
それで名前が酷似している・・・と

唱え終えたとたんまた体を光が包んだ

「IJの光に身を任せれば転送される」

「え？ 前はなんか強制的だったんですねけどーー？」

「やうか・・・それは相当な実力者になるな・・・
心開きの儀もしないのは異例だ 特殊家系を調べておく

「ありがとうございます」

「それでは行きましょうかね・・・

「行きまわ」

「待ちなさい 少し話がある」 「お前を歸すのは行つてから3日後だいいか?」

「はい」

そして2度目の感覺

地面に吸い込まれていった

帰つてきてみた。

「いててて つてこ」はー?」

見ると懐かしい部屋があつた

荒らされてもいいな

なにもそれでいいな

「ネットゲーム久しぶりにしようかな」

本当に涙が出そうになつた

少し裕福かなつて思つていたことが実に大切なものだつた

つて名言っぽいこと思つてるんじやない

時間がねえや

1階へ急ぐ!

1階

「お母さん 今日何日?」

「2月9日・・・だけど?」

「え?・・・あーそう わかった」

「（）飯何？」

「鳥よ手羽先の大きいのって感じかな？」

「おーしゃーーー！」

「ふう」「どう切り出せばいいかわからないや」

ベットに倒れこむ俺・・・何もできずに寝てしまつ

睡魔に戦闘しなかつた今日だ。

2月10日

「ハア 今日は学校休みか」

「今日中に話さないといけないんだよな ハア」

ため息混じりに一階へ降りていった

「お母さん？ お父さんは？」

「出かけたわよ 用事があるんだって」

「そか・・・あの・・・サ 話したいことがあるんだけど」

話してみた。

「話つて？」

「えつと、母さんつて「異世界」とか、「魔法」とか信じる？」

「深刻な話かと思ったら、そんなこと嘘んでたの？」

「いや・・・俺さ魔法が実在して地球では無いところに行かないダメなんだ」

「意味わからないわよ、そんな所実在するわけ無いでしょう」

スルーして・・・

「それで、俺、魔法を覚える学校に行く」と云なったんだよ

「どれくらい？」

「500円・・・かな」

「今居る学校はどうするの？まだ中学生でしょ？」

「そう・・・だけど向ひの世界で待ってる人も居るし」

「へえいつ行くの？」

「2日後・・・12日だよ」

「それって絶対なの？」

「うん もう決まってる 行く行かないではなくて
話だけしてつていわれて戻ってきたんだ」

「やつ 私も出かけるから 考えておくわ」

ふう 話すことだけは成功したようだ

でも不思議な点がひとつあるんだよな

向ひの世界で2回絶して

3回はいたとしても

この世界に帰ってきても1日経つてなかつた

どうこひとひつ

向ひの世界で向ひいても

この世界には1秒にもならないってことかな？

それだったらこいつまでも

向ひの世界に居るんだけじゃなー・・・

シュヴァルツ星に帰つてみた。

あれ以来母さんと話もせずに

帰つてしまつた

帰つてきたときはスレイトの家に転送された模様

スレイトがお出迎えしていた

他には誰もいない

「ただいま」

「早くしなさい」

魔法学校に入学するのは決定された様だ

荷物をまとめ・・・よつかと思つたが

何も持つてきていない

「そういえば魔法使いには杖とかが要るのかな?」

「わからない 必要な人と必要でない人がいるから」

「へえ それはどっちの方が落ちこぼれとかつてあるの?..」

「いいえ 体質とかだから才能の話になるけど

杖が必要でないほう
戦いや生活においては便利ね」

「へえ～・・・」で試してみよつか」

「いいわよ」「使えるかどうかはわからないけど」

魔法を使してみた。（1）

「まずは“炎”^{フレイム}よ

「わかった・・・

精神を静めてみる

腕を前にして手と手の間に

炎が出るイメージを作つてみる

「ふう・・・出来るかな? “炎”^{フレイム}！」

すると・・・何も出なかつた

「あれー・・・出ないなーやっぱ杖が要るのかな
貸してくれ」

「はい」

普通に渡していく

なんか素直になつたっていうかなんか変

性格が変わったのか!?

精神を静めて・・・

杖を向けて（スレイトに）

「人に向けたら
」

「炎^{フレイム}
」

魔法を使してみた。（2）

「フレイム
“炎”！」

「・・・ こっち向けないでよ
発動できないわね」

いやー失敗してしまったようだ

「全く使えないって
ありえるの？」

「ありえるわ

魔法には全部で10種類の魔法があり
その中に不得手があつて当然よ

「そうか・・・ 次のやつてみよーかー」

「アイス
氷 ウォーター エクスプローション

「水 サンダー ウィンディ

「風

「雷 ターミナル

とりあえずこれをやってみて

「アイス
氷 ！！

何も出ない杖も手もなんの反応もない

他のは・・・ 他のは出るハズ！

魔法を使行使してみた。（3）

「 “ 土 ” ！」

すると始めて変化が起きた

差し出した手の間にピキッキッとした

音を立てて声が出てきた

そして粉碎されて土みたいな感じになった

「 あら 土属性みたいね
次は・・・」

「 おっ なんかイメージは出来たゾ
“ 炎 ” 」

手と手の間に炎が生まれた

「 やつたー やつぱな
経験が俺を育てるんだよ
いやつたー 」

「 土系統と炎系統は同じ人物では
扱えられないってことになつてゐるの」

「 アイス
“ 氷 ” “ 爆発 ”
すげえ 全部出来る」

「なんてこと・・・
氷系統と炎系統も
使えないってなってるのに」

「すげえな

残りの3種教えてくれよ~」

「いいわよ

でもこの3種は
少し難しいわよ」

魔法を使してみた。（4）

「次は “**暗黒**” よ ブラックカーテン

使えたなら自分の任意で周囲の視界を
消すことが出来るわ
とても実践的だけど
戦闘で使えても
ほとんど意味はないわ」

「へえ～

「なんで？」

「自分が見えるのはいいけど

暗くしたところで

戦闘にはさして影響はないってところよ
殴り合いになるなら話は別だけど」

「まあやつてみようか

“**暗黒**” ! ブラックカーテン

暗くはならなかつた

天井の照明が煌々と光り輝いている

「この魔法は使えたら応用は利くけど
使える人物は相当少ないわ」

「次はなにするの？」

「マジック・ブレイク
“対魔” よ

魔法行使してみた。（5）

「」の魔法は相手が発動した
魔法を取り消す魔法よ
使える人間は多いけど
魔力を相当使うわ
連発するのは無理があるわ

「ほほほほ リスクは高い……と？」

「まあ そんなところね
それじゃ あなたに魔法を使つわ

そつまつて距離をおいた

「それじゅ 使うわよ
“炎筋”」

すると炎の光線がこっちに向かって走つてくる

「くつ “対魔”！……」

すると炎は四散した

「できるのね

「ごほほせ

「ううー?」

そして俺は膝から倒れこんだ

「言つたでしょ？魔力を相当量使うの
戦つときは出来るだけ
使わないほうがいい魔法よ」

「そつか・・・

次は何をするんだ？」

魔法を使してみた。（6）

「最後の魔法は“回復魔法”よ」ヒール・マジック

「回復かーどう練習すればいいんだ？」

「それで、自傷しなさい」

「いやだ無理

お前がやれ

「無理よ」

「まあこれは練習しなくていいだろ
男が誰かを回復させるのはちょっと抵抗が・・・」

「そう・・・それじゃ次いきましょうか」

「次・・・つて？一〇種やつたハズ」

「次はその魔法を戦闘系に置き換えるのよ」

「といつと？」

「例えば“炎筋”とか
フレイム・ビーム
そういう感じ」

「ハア？ 感じ？」

「どうすればいいんだ？」

「そうね 戦争になつたとして
炎だけ作り出しても意味ないじゃない？」

「そうだね」

「だから戦闘用に作り変えるの」

魔法を戦闘用に改造してみた。

「なるほどー それってどうやるんだ?」

「たとえば「炎を敵に向かって直進させる」っていう
具体的な例をイメージして
それを投影する
そのシートカットみたいなのが
戦闘用って感じ」

「へえ・・・じゃあ・・・“炎壁”」
フレーム・ウォール

「理解が早くて助かるわ」

「よしつ いい感じ “雷槍”」
ボルテックス

雷が炎を突き抜けてスレイトに向かって進む

「 水壁 」
ウォーター・ウォール

雷が噴水にぶつかって吸収した

そして水に電気をまとわせてこうちぢりぶつかってくる

「くつ “対魔”」
マジック・ブレイク

「私と戦つ氣?」

「いやー 経験の差がありますなー
勝てる気しねえや」

「それじゃあ 魔法の勉強でもしてなさい 明日学校に行くわよ

改良の種類を考えてみた。

ふう・・

「アイス・ミラー
“氷鏡”」

部屋に氷で出来た鏡が大量に設置された

「ボルテックス
“雷槍”」

鏡に向かつて雷が走る

鏡に反射して右往左往する

そして・・・

「ウォーターワール
“水壁”」

「ウォーターウィップ
“水鞭”」

電気がこもった水が撃り　的に直撃する

的は木端微塵に砕け散った

「学園は決闘クラブっていうのがあるらしいから
楽しそうだな
俺はいいセンいけるかな?」

「あなたは結構いけると思つわよ」

後ろからスレイトの声がした

今扉から入ったみたいだ

「そりかな？」

「そりよ

みんな一種くらいしか使えないんだから」

「へえ～ 僕も早く学校に行つて見たいな」

学校に行ってみた。

「イージが前に言っていたカーメアル学校よ

「やっぱ大きいな

「うん これから転入生の説明会が行われるから
あなたは講義室！ 行つてて」

そう言って地図を渡された

地理は無理だつてば～・・・

30分してやっと到着した全員着席している

俺の学校みたいにザワついてはいない・・・

「それでは ヒカリ コウタ 君が
新しく転入することになった
よろしく」

そう言って俺を招き入れたこの先生は・・・コール先生だ

俺を転送させた1人である

「お・・・俺は光 コウタです コウタと呼んでもらえればうれし
いです

魔法の使える種類は8種で使ったことの無い魔法は1種です
身分は被転送者です よろしくお願いします！」

転入してみた。

「よろしくお願ひします！」

講義室が初めてザワついた

「静肅に！」

ホール先生が鎮めた

「」ウタ君 8種使えるとは本当かね？」

「ハイ 室内でなければお見せしますが？」

「それじゃ外で見せてもらおうか」「

外にて

「それでは・・・コホン
“炎”^{フレイム} “氷”^{アイス}」

全種類見せてみた

炎の後に土系統を見せたらみんなすゞぐザワついた

「今日は授業なしかー」

3時間後

決闘クラブが活動していた

「俺も入部させてくれよ！」

決闘クラブに入部してみた。

「俺も入部させてくれよ！」

「わかりました。俺はエルムス・ダーンベルトだよろしくこの紙をコール先生に渡してくれ」

「了解！」

1時間後

「た・・・ただいま」

「遅かつたね」

「いや・・・場所が・・・わからなくて」

「そりか転入生演説のときも遅れてきたもんね」

「つるさこですよ」

一応一つ上のクラスだった 先輩だった

「それじゃ お手合せ願おうか」

「望むところですよ」

「威勢がいいな・・・“雷光”」

ライターリング・ライト

「うつ！？ 田ぐらましか・・・

「全方向掃射火炎”！！」

360度に炎が飛んでいった

「ウォーター・アーマー
“水装甲”」

体に水を纏つて進んでくる

「くつ マジック・ブレイク ボルテックス
“対魔” “雷槍”！」

ボルテックス
“雷槍”を避けて・・・

「ウォーターウィップ
“水鞭”！」

横薙ぎの水が迫つてくる

アイスドシェル
“遠氷結”」

鞭が凍つて落ちた

エクスプロージョン
“爆発”！」

エクスプロージョン
“爆発”！」

先輩は上に飛びたために地面を爆発させて俺の攻撃を回避した

先輩 「ライトニングボルテックス
“掃射雷槍”」

「くつ ランドウォール
“土壁”！」

そのまま雷は土に当たつて霧散した

先輩は俺の“ランデウホール土壁”に着地した！

決闘クラブに入部してみた。（2）

先輩は俺の“^{ランドウォール}土壁”に着地した

先輩 「^{ウォーターランス}一点水掃射」

“^{ランドウォール}土壁”を打ち破つて田の前に迫つた！

「くつ（パクるぜ） “^{ライトニングライト}雷光”！」

「うつ」

その間に距離をとる

魔力を込めに込める！

「^{アイスジャベリン}大氷槍”！！」

大きい氷塊が先輩に飛んでいく！

「^{インプローシヨン}内部爆発”」

俺の“^{アイスジャベリン}大氷槍”は内側から爆発したようだ

うつ 魔力が！

「くそ・・・ “^{サンダーソード}雷剣”」

手に持つタイプの雷を作つた 俺にはあと一回分の戦闘用でない魔

法しか使えない！

「うおおおおおお！」

思いつたり縦薙ぎ！

「ウォーターランス “一点水掃射”！ 肉弾戦か？」

ばしつ！ 雷が思いつきり水の槍に衝突

電気が吸収された！

「くつ これ使つたら・・・」

武器での小競り合いが続く

俺 「うおおお マジックブレイク “対魔”！」

先輩の ウォーターランス “一点水掃射”はきえた！

俺は氣絶しそうだが堪えて！

先輩のところまで走る！

ぴた！

先輩の首元に剣を向ける

「まいった・・・」

決闘！決着！してみた。

「まじった・・・」

先輩は心底悔しそうにそつ眩いた

「やつたー！ 勝つた！」

フラツッと視界が消え田の前を失つてしまつた

4時間後

「こじま・・・ベットか・・・なんでこんなところに・・・

時計を見ると10時を過ぎていた・・・

「寝よ・・・」

次の朝

「あつ 先輩 おはよう」わざわざ

「おつ おはよう」

「先輩の技ひとつ使わせてもらいました
あの・・・昨日勝つてしまつたりしてスマスマセん」

「何で謝るの？」

「いや・・・なんか俺が攻撃ばっかして無理に勝ってしまったかな・
・・と
思いまして・・・」

「いやいや気にすること無いよ
うちの部は八百長が大嫌いなんだ
先輩だから顔を立てておこうっていつのはナシだ
強制退部になるかもしねない」

「そなんですか？ 先輩って部長とかキャプテンとか
って感じですか？」

「うん・・・決まってるわけじゃないけど
そんな感じかな」

「へえ・・・そついえば
なんで決闘の腕を磨いてるんですか？」

「近々戦争が起ころんだ

決闘クラブは国の為 大切な人の為
それらを守る技術を磨いてるんだ」

「へえ そうなんですか・・・

俺は・・・スレイトを守るために腕を磨くつかな

「つむ 思い人が居る」とはすぱりしいぞ」

「ありがとうござります」

「うふうと・・・」「ウタ・・・」

「はつ 殺氣!-?」

振り向くと引きついた笑顔のスレイトがいた

「私はあんたに守られるめどひ弱じやない

「キレてる所 やこなんだ」

「助けて~~~~~」

スレイトと雑談してみた

「あのれあ スレイト?」

「なに?」

「スレイトって女子校に行つてるんだよね?」

「うん 両性混同は嫌いだから」

「へえ~ クラブって男女別れてるんだよね?」

「やうよ

「ふう 僕次の授業コール先生だから
早めにいくわ」

「わかつたわ」

講義室にて

「ホール先生! おはようござりますー!」

「ひむ おはよう ハウタ君話があるんだが

「なんですか?」

「最近レンデスフォン国軍拡が著しい

それにエリニア国とも友好的とは言えない

「ハア・・・つまり・・・戦争になりそいつことですかね？」

「うむ 理解が早いね」

それで 私が顧問である決闘クラブを兵役したいんだが
どう思つかね？」

そのとき 講義室の扉が開いた

「ホール先生 ハウタその話 本当?」

スレイドだった

兵役について話しかけてみた。

「その話本当?」

「ホール先生」「そうだよ 具体的なことは決まっていないがね
そのための決闘クラブなんだ 楽しいだけがこの世
じゃないんだよ」

「でも・・・」「ウタはこの世界の住人ではないし」

「それはそれ
これはこれだよ
ウタ君は戦争に行つても充分な戦力に
なりうるだろ?」

「そうですか
それだったら私も行きます!」

「どうか 兵役に参加することを私が取り消すことはできない
一般兵役に参加してみてはどうだ?」

それを聞いてスレイトは教室から出て行つた

「先生つて戦争にじうしても
勝ちたいんですね

あんな女の子にも参加させるなんて」

「君はあの女の子のことと思つているのかい?」

「そうですね

「あの子は君が心配だからつっこむことしてるとんじやないか?」

「そうですかね?

でも俺が行くってなったからあいつも行くってなったのかも
しれませんね」

「そうなんだな

会話をしているうちに生徒が降りてきた

「それでは授業を始める

ゴール先生は魔法史の先生だ

「今から250年ほど前

俺にはまだ何もいって感じだな

授業が終わって 今日は魔法実習があるなあ・・・楽しみだ

魔法実習してみた。

魔法実習の先生は エンガス先生だ

「それではまず基本から

“フレイム”
“炎”
“アイス”
“氷”
“エクスプローション”
“爆発”
“ウインディ”

“土”
“ランド”
“風”
“ウォータ”
“雷”
“サンダー”
“水”
“ブラックカーテン”
“暗黒”
“ヒルマジック”

“回復”
“マジックブレイク”
“対魔”
“マジックブレイク”

です 自分が使える魔法を使ってみてください」

みんなそれに魔法を使つてみてください

「それでは 実技に入ります
先生が作った “土分身”
と戦つてみて下さい
危なくなつたら止めます」

クラスは全員で58人 全員文分身を作つてしまつた

なんという先生だ

俺もやろつかな・・・

「それでは、はじめてください
“対魔”^{マジックブレイク}は禁止とします」

分身消されちゃ 意味ないもんな・・・

先生の分身と戦つてみた。

先生の分身は魔法使えるのかな？

少なくとも実力は1／58だよな

「爆発」
エクスプローション

俺は爆発させて自分を跳ね上げる

上から

「2乗魔法」「鳳」
フュニックス
ウォーターランチャー

ただ単に風と炎を一度に繰り出しだけなんだが

「水砲」
ウォーターランチャー

先生も（の分身も）魔法は使えるみたいだ

俺の“鳳”は霧散した

先生（の分身）が打った“水砲”はまだ直進してくる！
ウォーターランチャー

「くつ」「内部爆発」！
インブローション

水は爆発して消えてなくなつた

「水連射砲」！
ウォーターガトリング

めりやくひやに打つてきやがる

「エクスプローション
爆發！」

空中に居る自分を着陸させる

「フレイムバズーカ
高压火炎！」

「うちに狙いを定めた“ウォーターガトリング水連射砲”を大量に蒸発させる！

先生 「ボルテッカ雷速身体」

そりやないでしょ

先生の分身と戦つてみた。（2）

雷と土は使えないんじゃー？

つていうか先生（の分身）は速度を上昇させてくれるー。

「くっ！ “全方向掃射火炎” ！ ！ ！」

どすつという音がして分身は消えた

勝つたようだ “全方向掃射火炎” は相当な

魔力を消費してしまう “対魔” 並だ・・・

「先生勝ちました～・・・」

つて勝つたの俺だけか・・・

「やつか 素晴らしい～」

「ありがとうございます」

「これにて実習を終了とする

他には科目はないのでゆっくりと休みたまえ」

寮にて

「疲れたー」

窓を見る 決闘クラブが集結している

「俺もいかなさや」

戦争の準備をしてみた。

「おう 「ウタ君来たか」

「ホール先生 なんで俺も呼んでくれなかつたんですか?」

「君には話しておいたからね

これから戦争の最前線の部隊として

2日後に出発することになった」

もつそんな時か

俺は知つていたがみんなは

知らなかつたようだ

「敵軍はこちらの2～3倍になる

先行部隊がどれだけ時間をひかせるかが
カギとなるワケだ」

「先行部隊は俺たち以外に居るんですか?」

名前を聞いていない人が先生に聞いた

「王宮の精銳部隊が3部來ることになつてゐる
みんなはこれから戦争が終わるまで
授業は無い
準備をしておいたほうがいい
戦闘の経験でも積んでおくなら

私としてもいいぞ

「それじゃ俺とお願ひします」

俺は先生に下克上してみた

先生と決闘してみた。

「俺とお願ひします」

「そりか それではダーンベルト君 始めの合図を頼む」

「それでは・・・」「ホン “始め”！」

先生 「 “雷速身体” “雷劍”」
 ^{ボルテッカー} ^{サンターソード}

完全に武装してきた！

俺 「 “爆発” “冰鏡”」
 ^{エクスプローション} ^{アイスミラー}

“冰鏡”に向かつて

「 “雷槍”！」
 ^{ボルテックス}

鏡に乱反射し始めて・・・ 先生がいない！

「終わりだよコウタ君」

後ろに回つこまれていた 空中に飛びのに “爆発” も

使ってないなんて 強すぎる！

「参りました」

地上に着陸した

「コウタ君 遠距離よりは近距離の技のほうがいいぞ
たくさんの相手をしたときに
1人1人倒すより
自分が動いたほうが
早い」

そういえば先生は2つの魔法しか使ってない

省エネだ！

「分かりました」

「それでは各自好きなように動くといい

「コウタ君 決闘しないか？」

リベンジしてきた。

「決闘しないか?」

ダーンベルト先輩が俺に話しかけてきた

「もう少し後でいいですかね?
今休憩します」

「そうか 今向こうで決闘してるからあが終わった頃にしようか

「分かりました」

「向こうでしてるのは
フォーク・ミハエル君だ君と同級だろ・・・
もう1人は君に並ぶ新生 スネーク・クライマイト君だ
クライマイト君は特殊な家系で特殊魔法系の技を使える」

「へえ・・・やっぱその魔法は強いですかね?」

「うん あの子が使える魔法は
“魔法特性”だ

厳密に言えば魔法ではないが
すべての魔法がうまく使えるというものだ
今は“炎”^{フレイム}が一番うまく使える
次は“氷”^{アイス}が最もうまいとか
いつでもどの魔法が1つ使える

「へえ・・・すぐに切り替えればどの魔法も使える・・・と?」

「そうだよ そしてあの子自体は使える魔法は無いんだよ
あの“特性”が無ければ魔法は皆無なんだ
それがあの子が生まれた家系だ」

「ふむふむ・・・なんか悲しいな

「おっと決まったね 勝敗は・・・クライマイト君だな」

「先輩 しますか」

「そうだな」

リベンジしてきた。(2)

「それでは 始め！」

審判係りになつたミハエル君が叫んだ

俺：「“全方向掃射炎”！！」

先輩：「“水砲”！」

俺の炎はかき消された 先輩の“水砲”も一緒に蒸発した

俺：「“上降下雷”！」

先輩：「くつ “土壁”！」

俺：“2乗魔法”吹雪

先輩：“うおおー！？” “爆発”！」

爆発で横に飛んだ

俺：“追尾炎砲”

先輩：“ぐつ・・・ “内部爆発”！」

俺：“雷速身体” うつ！？

この魔法“全方向掃射炎”より魔力使いやがる・・・先生省エネじ

やなかつたあ

すこじフランく

先輩：「！ “^{ウォーターガトリング}水連射砲”！！」

俺：“^{サンダーソード}雷剣”！」

そして・・・

俺は速度が数倍なので軽くかわして

リベンジしてきた。(3)

俺は“^{サンダーソード}雷劍”を持つて先輩の居る場所へ走った

“^{ボルテッカー}雷速身體”で速さは倍増されている

俺：「うおおおおおおおおお

先輩：「ブツブツツブツ」

なんか詠唱してゐー？

先輩：「4乗魔法 “^{フォースブレイク}雷爆発水土”」

俺「うおおおおおおおおお

剣でなんとか押さえ込む！

土に電気を吸い取られ剣の実体が消えた！

ミハエル：「“^{マジックブレイク}対魔” 勝敗はダーンベルト先輩の勝ち！」

俺：「くつ・・・・・

先輩：「ははは・・・これは使つまいと思つてたんだけどね

俺：「奥の手つてやつですか！」

クライマイド：「次は俺としないかい？」

俺：「俺？ 明日なさいいですよ」

クライマイト：「分かった 9:00にここに来るんだ

期待の新生 vs 期待の新生。

朝の9：00

クライマイアイト：「来たね」

俺：「逃げるほど俺は堕ちてない！」

クライマイアイト：「うか ははは 面白くななりそうだ」

先輩：「俺が審判をさせてもいいつよ
・・・はじめー。」

俺：「“追尾炎砲”」

クライマイアイト：「“遠距離氷結”」

俺の“追尾炎砲”は固まつて落ちた

俺：「“炎刃円盤”！」

俺の手から炎の円盤が3つ噴出した

クライマイアイト：「一点点暗黒」

俺の周りだけ暗くなつたようだ外の視界が見えない！

クライマイアイト：「9乗魔法“究極九点魔法”」

アルティメット・ナイン・ブレイク

なんだつて！？ 9乗魔法だと！？

俺：「うおおおおお 使ってやる！ “**最大出力魔法**” ! ! ! !」

俺の魔力をすべて放出して光線を出した

“**究極九点魔法**”にぶつかったのも分からぬ！

アルティメット・ナイン・ブレイク

先輩：「 “**対魔**” 」

俺の周りの暗黒が消えた

先輩：「 クライマイト君の勝ちだ 」

負けてみた。

俺：「なんで俺の“**最大出力魔法**”が消えたんだ？
フルマジック

威力は負けてないと思うけど」

クライアント：「9乗だから“**回復魔法**”

以外の魔法が入ってるんだ」

俺：「……つまりは……なんだ？」

先輩：「おそらく“**対魔**”も入っているのだろう」
マジックブレイク

クライアント：「そういうことなんだ」

俺：「そこまで長引いても無いのにあんな大技つか

クライアント：「君のレベルなら打ち破れると思ってね
期待ハズレだよ」

そう言って寮に帰つていった

先輩：「……」

俺：「……」

くそ……俺なんかまだまだじゃねえかよ

あのとき“**対魔**”使つていればよかつたのかな？
マジックブレイク

先輩：「君が“対魔”使つていたらどうなつていたかな？」

俺：「わかりませんが・・・相手にも“対魔”は入つてゐるんでしょう？」

“対魔”同士で相打ちになつていたとか・・・？

先輩：「そうか君の“最大出力魔法”で相打ちになつて俺の“対魔”で相殺された・・・つて所かな

俺：「あの魔法にどう勝てば良いんだ！？」

俺は氣分を害し寮に帰つた

対抗策を考えてみた。

なんだよあの理不尽な魔法は！？

どうやって打ち破れと？

俺は9種しか使え無いのに

図書室

魔法の本をつと・・・あつたあつた

本の題名は「クライアント家の“魔法特性”」

この図書室には大体の特殊家系の技が載っている本があるって聞いた
たから・・・

どれどれ・・・

本：“魔法特性”には便利な点が2つある
1つにはどの種類の属性も使える事だ
もう1つは一度に10種発動することも出来る
不便利な点は1つ

クライアント家に生まれる子には
その子自身の属性がないということだ

俺：「ほとんど聞いた話だな」

俺も俺に合った本でも探すか

俺「ん？・・・あれ・・・今は・・・？」

俺は寝ていたようだ二つの間にか・・・？」

なぜだらつゝと 兵役に間に合わない！

どれだけ寝てるんだよっ 俺！

寝ていた理由。

あれ・・・扉が開かない！？

なぜだ誰かの陰謀を感じる・・・

その時に背後の本が光つた！

俺：「なんだ？」

なぜかその本に興味を惹かれ

読みいつてしまつたのは覚えている

題名は「生存先不明の被転送者」だ

俺となんとなく共感を得て読んでいたものだ

俺：「いきなり光りだした・・・？なぜだ

そして本が宙に浮いてページがめくられていった

そして803ページ「コウタ」という章があつた

俺：「なぜだ！？俺が読んだ時 目次にこんな章はなかつたッ」

読んでもみると ××年 被転送者 ヒカリコウタ

と書いてある

この本は一体……？

俺：「誰かの悪戯だろ……？」

扉に注目する

俺：エクスプローション“爆発”！！

扉はびくともしなかった

俺：“なぜだ”

“最大出力魔法”でもやってみるか？

待てよ……本がなぜめぐれらたのか？

読んでみようか……

本を読んでみた。

本：“コウタの先天性特性” 魔法8種使用可

後天性特性 “生物召還” 使用可

“無生物召還” 使用不可

俺：“俺の使えるモノがすべて書いてやがる・・・”

本：“魔法威力自意向上” 使用可

“瞬間移動” 使用不可

“未来予知” 使用不可

俺：“なんか使えないのいっぱいあるなあ・・・才能ないのかな？”

いつの間にか読みふけっている俺に気づいた

俺：“！！！これは

本：“究極召還術・火龍” 使用不可

“究極召還術・氷龍” 使用不可

“究極召還術・風龍” 使用不可

“究極召還術・雷龍” 使用不可

“究極召還術・水龍” 使用不可

“究極召還術・土龍” 使用不可

“究極召還術・暴龍” 使用不可

“究極召還術・闇龍” 使用可

“究極召還術・滅龍” 使用不可

“ 究極召還術・再龍 ”
究極魔法 第1種
究極魔法 第2種
究極魔法 第3種
究極魔法 第4種
使用不可

“ 砂漠 ”
山 “ マウント ”
海 “ シー ”
森 “ ウッド ”

究極魔法 失われし 第5種
“ 龍巣 ”
ドラゴン・ハウス

俺：「なんだこれ・・・究極召還術・闇龍・・・？」

普通の魔法の10種と龍は同じだな
俺こんなのが使えるのか・・・？」

地形魔法 “砂漠”

本：“龍巣”
呪文

「私は 契約せし者 龍の巣よ出でよ」

効果 自分が召還できる龍が出現するフィールドが出現する『

俺：「ふう～ん・・・」

本：“究極召還術・闇竜”
呪文

「私は 古約せし者 黒き龍よ 私の 魔力を喰い 出でよ」

効果 “龍巣”が召還されていれば “闇龍・デイライド”
を召還することができる

俺：“こんなものの戦争で出したら 荒れ過ぎるだろ・・・
ここを脱出するにはこれを使え・・・と?”

本を力バンに入れて呪文^{スペル}を覚える

扉を見据えて唱えた

俺：“砂漠”！

すると扉は砂になつた 扉の形は残したままだ

俺：「よしー」

そのまま砂の扉にタックルした

ボフといつ音を立てて俺を外に出した

俺：「兵役はもう終わってやがる」

そばに掛かっていた時計を見て呟いた

はじめましてー・デイライド

俺：「私は 契約せし者 龍の巣よ出でよ

私は 古約せし者 黒き龍よ 私の 魔力を喰い 出でよ」

最初の魔法ではなにも変わらなかつたが

次の魔法で外に闇竜・デイライドが召還された

デイライド：「お前は誰だ？」

「わおわおわお超かっこ——

怖い

俺：「俺は」ウタだ

デイライド：「」ウタ？ お前300年前にもうここに居たのか？

俺：「いや……」ないけど

デイライド：「フン あいつの予言せられたるものじゃの
ワシはデイライドじや 知つておるかの？」

俺：「名前だけなら本で知つてます」

なぜか敬語になる俺

「いやいや…」「なんかワシはまだから生きてる闇龍・ハイライド
じゃ」

俺：「もうですか　あのーお願いがあるんですけど…」

そのとき粗鄙な遠くで爆発音が起じた

ハイライド：「向こうが騒がしいの…・・・戦争でもしてるとか?
願いとはなんじゃ?」

俺：「あの戦争の場所に連れて行ってください
一秒を争うんです!」

「デイライドの背中」

俺…「ひかせがおおきな龍族の背中もさう」とる？

デイライド…「うわーこの少しほは静かにしてくれ

俺…「デイライド…なにで浮べばいい？」

タメ口でもことと叫んでいた

デイライド…「好きなように呼ぶがいい
350kgsくらいこすぐじや もつ着へば

俺…「もう5分も経つてなこのー！」

デイライド…「龍族をなめるんじや ないぞ」

俺…「着いた…」

見方軍…「なんだあの龍はー？」

クライアント…「あいつ ここにいたか

敵軍…「あの龍は敵か！？」

俺…「デイライドは攻撃するの？」

デイライド…「ワシは戦わんよ ワシの主もさうとする

ボフンとこゝ音がしてそこに居た闇龍は消えた

俺・「ひおおおおおおおおおおおおおおおお　“森”　…」

いい感じにクッシュョン代わりの木々が建つた

バキバキといつ音とともに戦争に参加した

戦争の中の俺の戦力

俺：““海”^シ “重力追加”^{グラビティ}！”

30人ほどを今ので殺してしまった・・・ 戦争とはいえ心は痛む
よつだ

敵：““台風”^{ハリケーン}！”

おおう 結構な魔法を使うね・・・

俺：““森”^{ウッド}”

防風林を召還

俺：“2乗魔法”^{ライトニングウォーター・ウェーブ} “雷水鞭”^{ラム}”

感電をせつつ前に進む

俺は

俺：“生物召還！”^{ゴーリム} “土魔人”^{ゴーリム}”！—！—！”

土塊が盛り上がり敵を壊滅させた

見方軍：“全員進めー”

3回の龍

敵の領地まで到着した

俺：「うおおおおおお！」

“土魔人”^{ゴーリム}を操りながら進んでいく

「のままなら勝てそうだ

？？？：「貴様等 好き勝手やつてくれたな」

俺：「誰だ！？」

？？？：「わが名はフーチャクトだ」

フーチャクト：「貴様等の快進撃はここまでだ」

すると地面から炎龍・ブラストギヤムが召還された

フーチャクト：「この炎龍・ブラストギヤムが貴様等を焼き尽くしてくれ

俺・クライアント：「私は 契約せし者 龍の巣よ出でよ

私は 古約せし者 黒き龍よ 私の 魔力

を喰い 出でよ。」

さりげなくの龍が召還された

この場には

フーチャクト・ブラスト・ギャム

俺・デイライド

クライアント・ボルティンギッド

が生き残っている 他の者は死んだ

一応決闘クラブの者はまだ来ていないうらしい

俺：「デイライド 賴む！」

デイライド：「レリはワシがやるしかないのぉ～」

3回の龍(2)

「プラスストギャムが咆哮をあげた

俺：「動くな！　“重力追加”」

クライアント：「“究極九点魔法”」

重力で動きを制限し渾身の一撃を加えた

デイライド：「そんな攻撃は少しのダメージしかないぞ！」

デイライドはそう言つて空中に飛んだ

フーチャクト：「“ライトニングボルテックス”」

クライアント達を狙つたようだボルティンギッドは咆哮をあげた
“掃射雷槍”は消えた

デイライドが溜めていた炎を口から吐き出した

紫がかつてゐる

直撃した 動きは俺が制限している

俺：「“海”」

「プラスストギャムの足元が海となつた

ボルティンキッドは海に向かつて雷を口から吐き出した 雷龍だつたようだ

俺：“ 海面大上昇”

雷を大量に含んだ海を操作する俺 強くなつたなあ

クライアント：“ 重力特異”

プラスティックに向かつて四方八方の超重力が掛かつた

3回の龍（3）

フーチャクト・「」は一旦戻くか “^{ムーブメント} 転送”

フーチャクトは逃げたようだ

クライアント：「自分を^{転送}させたようだな
あんな呪文^{スペル}はきいたことが無いぞ
もしかするとお前と関係あるかもな」「ウタ

俺：「やつ・・・かな？」

先行部隊はほぼ壊滅させた

俺たちはそれを告げるために 町に戻った

そして 敵がどんな技を使うかを報告した

【プラストギヤム】【ティラlide】【ボルティンギッド】

とは昔の伝説の龍であり

実在しないと言っていた

幻の被召還モンスターだったのだそうだ

そしてこの龍10種類 どれかひとつでも召還できた場合

“究極龍召喚師” と呼ぶらしい

ムーブメント・ファーム

俺：「俺が生きていた世界では
スポーツ位しか出来なかつたのに
こつちの世界になつたら“究極”の称号を持つてゐるなんて…
」

クライアント：「こつちの世界に来たのは“偶然”じゃなくて
“必然”だつたのかも知れないな」

スレイト：「コウタ！」

久しぶりに見た“大切な人”が俺に抱きついてきた

俺：「スレイト！ 久しぶり どこ行つてたんだ？」

スレイト：「兵役にでる志願書出しにいつてたの
あなたが先行部隊だつて聞いたから
無事でよかつた…」

スレイトは涙を浮かべている

俺：「心配かけてごめんな

味方軍「そろそろ出陣する

生き残つた先行部隊も来るんだ」

俺・クライアント：「ハイ！」

後行部隊

後行部隊には相当な人数が居た

いろいろなところからの兵役

一般からの戦争参加（10人もいない）

王宮の精銳部隊（俺やクライアントの足元にも及ばない）

魔法師（俺みたいな特別な魔法を使える人たち）

その他つていつところだな

敵：“炎劍”^{フレイムソード}

クライアント：“龍息吹”^{ドラゴン・ブレス}

敵軍は近距離戦闘派のやつらが来たみたいだ

クライアントの前に次元の穴が開いた

その中からボルティンギッドの息が吹かれた

良く言えばとんでもなく強い風

悪く言えばただの風が敵を襲つた

敵：“対魔”^{マジックブレイク}

穴は消された

俺：“うおお 2乗魔法“鳳”！”

大火力が敵を襲う

敵：“水装甲”

敵はもう5人と居ない

俺：“海”

クライアント：“重力追加”

敵を壊滅させた

こちらに攻撃は一度もされていない

精銳部隊は結構強いみたいだ

味方軍：“進むぞ！”

“自作魔法”

味方軍：「行くぞ！」

味方軍が進んでいく

俺：オリジナル・マジック ブロック・サーチ
「自作魔法“結界探知”」

クライアント：オリジナル・マジック
「自作魔法？」

俺：「俺が作つた魔法だ これを使えば俺の周囲4kmの範囲でなにがあるか見える・・・」

クライアント：「なかなか使える魔法だな」

俺：「だろ？ お前に勝つためにいろいろ努力してるんだ

・・・！ 敵襲！」

見方軍：「どのくらいの遠さだ？」

俺：「あと4分くらいだ！」

魔力を足にこめて思いつきり走っている

俺とクライアント

馬に乗つているみんな

疲効度は全然違う

俺
：「
“
山”
マウント
”
“
内
部
大
爆
發
”
ハイパー・インプローション
”
！
！
！”
」

敵襲

目の前に出来た山が大爆発した

こっちの軍には爆風のみきた

敵軍：「うおわあ」

クライアント：「ウェンディ・フレード “鎌鼬”」

俺：「ストーン・スロー 2乗魔法 “岩石投下”

“インプローション 内部爆発”」

岩を落としてひとつひとつを爆発させていく

クライアントは風の力で真空を作り出し

敵を切り刻んでいる 眇しい血が飛び散る

敵：“3乗魔法 フレイムウオータサンダー “炎・水・雷合成魔法” トリプルブレイク “三乗魔法”」

味方：“ランブル・ヴァーザー 土石流”

敵の魔法を土で味方がとめた

俺：“2乗魔法 ハリケーン “台風”」

クライアント：“ウタ！ その風使つぞ

“アイス・マジ・ソード 氷短剣”」

氷で出来た短剣が俺の風に舞い敵を襲う

俺：「ふう・・・異例2乗魔法“マジック・ブレイク・ゾーン対魔結界”」

相手に魔法を規制する結界を張った

チートだなこれ 結界は俺だけの技だしなあ・・・

クライアント：「敵に向かう風を頼む！」

俺：「わかった “ストレート・ウェインディ直進風”」

クライアント：「うおおおお 最大火力！“ドラゴニック・フレイム龍偽炎”」

敵軍本拠地

クライアント：「“龍偽炎”！」
ルゴニック・フレイム

俺の風に流され強化し敵を焼き尽くした

味方軍：「よし 後は本拠地に乗り込むだけだ！」

その時 頭上から火球が飛んできた

俺：「危ない！！！」

俺はスレイトに走り寄つて魔法を唱えた

俺：「“無効化結界”！！！」
ドント・マジック・ゾーン

目の前にある火球を消した・・・と思つたらこれは魔法ではなかつた！

クライアント：「“土壁”」
ラシード・ウォール

俺と火球の間に入り込んで壁魔法を唱えた

俺：「ありがとう..

スレイト 無事か？」

スレイト：「ええ 無事よ

感謝してあげる

俺は普通に“土壁”を使えばよかつたのに

あんな魔力を消費するものを使ってしまつたんだろう

クライアント：「コウタ！ ボケつとするなーーー！」

俺に向かって火球が飛んできた

敵はフーチャクト

俺：「うわあああああ

スレイト：「バー・ラング・ハンマー“炎槌”」

スレイトはハンマーを作り出し炎をかき消した

俺：「ありがとう」

スレイト：「あなたのためにやつたんじやないからねーー！
へんなこと思わないでよ」

やつて戦乱の地を駆けていった

俺：「なあ クライアント スレイトって典型的なシンデレだよな

クライアント：「そうだな 作者はやつるのが好きなんだひつ

俺：「そりが……」

上を見上げるとブラストギャムが炎を吐き出している

俺：「クライアント 僕たけも出すか……」

クライアント：「そうだな 前と回りよつて差を見せつけやつ
じやないか……」

敵はブラストギヤム

上から「ブラストギヤム」が咆哮をあげ

炎の塊を打つてくる

俺：「生物召還“土魔人”」

地上に降る火球を“土魔人”に打ち消せる

そして究極召還術の詠唱をする

地面が光り闇竜が召還された

ディライド：「なんじゃまたあいつか」

俺：「前は取り逃がしたから」

フーチャクト：「フン貴様か 前回の怨みここで晴らしてくれるー！」

ブラストギヤムから火球が飛び出てくる

俺：「あの火球は任せて！ “炎反射鏡”！」

火球は俺の出した“炎反射鏡”にあたつて反射した ブラストギヤムに火球が襲う

ディライド：「いいぞ」

そのとき ボルティンギッドも召還された

クライアント：「遅くなつた グリニッタ・パラスト “重力特異”」

フーチャクト：「一度も同じ手を喰らいつか！！」

“ディフェンス・パリア・ボール
守護珠”

禁術の守護魔法

フーチャクト：「 “**守護珠**” ディフェンス・バリア・ボール」

俺が跳ね返したブラストギヤムの火球も

クライアントの“**重力特異**”グラビティ・ブレイクもバリアにあたって消えた

フーチャクト：「この技こそ我が家系の極意 貴様等如きに使つことになるとほな」

俺：「デイライドー何とかできないか？」

デイライド：「むりじゃ あれは特殊といつても禁術扱いになつておる

「どこで知ったのかはしらんがあれは止めようが無い

クライアント：「**対魔**」マジックブレイク

クライアントは魔法をかき消そうとしたが

一瞬見えない壁が軋んだだけですぐに元通りの状態になった

クライアント：「一瞬に賭けるしかないな」

俺：アルティメット・ナイン・ブレイク「そつみたいだな お前の“**究極九点魔法**”と俺の“**最大出力**”フルマジック」

を使えばなんとかなるかもな

クライアント：「それに究極龍も2匹居る　これが無理なら諦める
しかない」

そう・・・だな やるしかないよな

クライアント：「いくぞー！」

今世紀最大級の大衝撃

クライアント：「**究極九点最大出力魔法**」
アルティメット・ナイン・フル・マジック

俺：**“最大出力対魔”**
フル・ブレイク

俺たちの最大の攻撃にあわせて究極龍の2匹が最大出力の咆哮と攻撃を仕掛けた

その瞬間大地は揺れ 天は裂け 別世界への道を作り出した

俺：「あ・・・あれは！？」

その裂け目から見覚えのある人物が出てきた・・・旧友のコウヘイだ

コウヘイ：「うおおおおおおわあ ここは！？ 戰場！？ コウタ
！？？」

パニックになっている模様 僕たちが創り出した衝撃は古代の禁術をも吹きとばしたみたいだ

コウヘイ：「なんでお前が居るんだよ！？」

俺：「それはこっちのセリフだ」

落ちてくるコウヘイを俺は“森”
ウッドで受け止める

コウヘイ：「なんだ今の一？ お前が出したのか？ う・・・ん？」

氣絶したようだ

旧友の登場

「ウカベイ…」「うわはー?」

やつと戻を覚ましたよつだ

俺：「ここはお前や俺が居た世界とは全く別の世界だ」

「ウカベイは一瞬「うそつけ」と顔をした

そのときひしりからスレイテとクライアントが入ってきた

スレイテ：「話は聞いたわ あなたウタと同じ世界から来たんですね」

「ウカベイ…「世界はどうかわかりませんが いかおつかスマイトです」

「いかおつかなんだ

クライアント…「ウカベイ君はぜひこの世界に来たんだ」

「ウカベイ…「どうやつて…なんか…地面が光つて…上手く言えないけど…なんというか…不思議な…」

俺よりも説明が下手なやつだった

俺：「魔法陣が出てきて地面に吸い込まれた…と?」

「ウヘイ…」「う…うん そうだ そんな感じ」

助け舟にすがるような目で周りを見渡していたコウヘイが

俺を見た

「ウヘイ…」「そういえばお前戦場で森を出現させたのって
なんだ?」

俺：「俺の魔法だ」

「ウヘイ…」「へえ… お前そんなことが出来たのか」

俺：「お前だつて出来るさ 僕と違つてのみじみは早いんだから」

「ウヘイ…「別部門だろ」

クライアント：「そろそろ行こつか 「ウタ」

俺：「そうだな」

二人は出て行った

スレイト：「あの二人は戦場が待つているのよ

あなたは私のメイドに世話をもらつてて」

旧友の登場（後書き）

本当にスマスマセーン♪♪

修学旅行からは2日前に帰つてきてたんですが
親とのトラブル・荷物・宿題と追われて・・・うわーんつて感じ
でした

もちろん修学旅行先で話は考えてあるので

振り替え休日の月曜に8～9話くらいこな進もうかと思ひます

【異世界に戻る】をどうぞよろしくお願いいたします

戦争→決着→(1)

俺：「今の戦況は？」

クライアント：「どうだろう 僕たち2人が抜けてからは膠着状態
つて所か」

俺：「王宮の精銳部隊も大した事じゃないなあ」

味方：「貴様！」

俺に向かつて味方が攻めてくる

俺：「ほんの冗談ですよ（嘘）W」

味方：「人間氷結！」

おっと殺す氣で来たみたいだ

俺：「ブライマル・マジック
“複散魔法”
マジックミラー
“魔法鏡”」

味方の打つた魔法を複製して敵軍に襲い掛かるように設定

敵は氷像になった

俺：「急ぐぞ！」

襲ってきたやつは軽く唖然としていた

一蹴して次の支配地に向かつた

敵の戦力はほぼ皆無 僕たちは敵の領土を独占しようと殺しまくつ
ている・・・

俺：「王宮の命令だから仕方ないけど
こんなに殺す必要もないんじゃないかなあ」

誰にも聞こえないよつに呟いた

戦争の決着（2）

俺：「うおおおお
“燒殺地獄”」

クライアント：「なんていう 名前なんだー？」

俺の田の前には溶岩というかそんな感じの

熱を帯びた物体が敵を焼き・殺していた

味方：「これにて占拠する地域は無くなつた
戦争は・・・終了だ！！！！！」

おおおおおおおおおおおおおおおおと歓声が沸く

俺は
・
・
・
・

俺：「クライアント」
転送魔法使えるか？」

「クライアント：「無理だよ
やないか？」
君オリジナルで作つてみればいいんじ

俺：「そうだな・・・創作魔法・・・【創作】」

まず人や物を自分の意で好きなように動かせるように

思い浮かべる・・・呪文は・・・モチ一
スペル

俺
：「
“
転送”
ムーブメント
！」

次の瞬間俺は「ウヘイの病室に居た
クライアントも同行した

つかの間の決闘（1）

先週戦争は終わった俺が学校に行ける日数は450日ほどだ……

「ウヘイ…」「おー お前 王宮の精銳部隊の勧誘断つたって?」

俺：「俺は行つたとしても450日行けない……パートタイムになるじゃマシだろ」

「ウヘイ…「そんなもんかね?」

俺：「どうせ地球に戻つたら何もする「とはなくなる…」

「ウヘイ…「いつ無く悲観してるんだな」

俺：「ああ…・・・最近クライアントに10戦7勝以外いいことねえ
「や

「ウヘイ…「めちゃくちじん

俺：「そんなもんかね?」

戦争が終わつてどうも落ち着かない俺…・・・

クライアント…「一戦しないか?」

俺：「おう…・・・

クライアント…「ウヘイ君 合図を頼む

「ウヘイ・「アイズ? ああ はじめー!」

クライアント：“龍炎”

俺：“雨”

クライアント：“なにがしたいんだ?”

俺の作った雨に影響されず“龍炎”は進んでくる

俺：“熱雲”

クライアント：“? ?”

クライアントの放った“龍炎”は直進中だ

俺：“複散魔法”
“魔法鏡”

俺とあいつが放った魔法は両方クライアントに向かっている

クライアント：“フム “土石流””

俺：“そつせるかああ～ “堤防””

ふふふ 二つの攻撃方法ならお見通しだ

クライアント：「くつ “爆発”」「
エクスプローション

俺：“無魔結界”」
ブーンフレイク

終わった・・・

クライアント：「なめんなあああああ」

なんと先に出していた“土石流”を操作し始めた
ラングウェーザー

俺：「ぐうお」

呆気にとられ一ダメージ喰らひてしまった

クライアント：「ぬぬりあああ」

いつも感情的にならないクライアントが叫んでいる

俺：「ぐうおおおおお “重力追加”」
グラビティ

土を抑えた・・・？

クライアント：「フンー」

なんと俺の超重力空間から土を脱出させ自分の結界をぶち壊した

クライアント：「へへ 反撃開始だ」

」

つかの間の決闘（2）

クライアント：「^{ランド・フォール} “^{土面上昇}”」

俺の足元の地面が空に向かって上昇し始める

俺：「うおー？」

もちろん俺も上昇する

クライアント：「^{ライティンク・フォール・ブレイク} “^{降下雷撃}”」

上から雷が降る

もうろん俺は空に近いためすぐ当たりかかる

俺：「ぐううー...^{△ブメント} “^{転送}”」

おれは地面上に脚をついた

クライアント：「それはなしでしょ？」

俺：「しつたこつちやない いつなつたら使ひぜええええ
“^{ソーコーティーン}
^{消滅結界}”」

クライアントの周りにすべてを無に帰す結界を張った

クライアント：「...」
「^{ボルテックス} “^{雷槍}”」

雷の矢は俺の張つた結界に衝突して消えた

クライアント：「これは・・・」

俺：「はあはあ　俺の作った最高傑作だ・・・」

クライアント：「ぐ・・・負けだ」

俺はチートとも言える魔法で勝つた

魔法の消費量はヤヴァイ

次の目標！

クライアント：「あれはないだろ」

俺：「そつかな？ 最初っから上級魔法を使つてぐるよりマシだ」

上級魔法とは常人では扱えないような魔法だ

俺やアイツはよく使つてるが・・・な

クライアント：「それよりこれを見ろ」

俺：「？・・・これは・・・！」

クライアントが見せたチラシにはこう書いてあつた

チラシ：『マジック・バトル・トーナメント“魔法決闘大会”開催決定！

参加資格は魔法使いであること
身分があること（被転送者可）

概要

最初に“選手塔”の100階まで登ります

1階1キロで100階100キロを1時間で走つてもらいます

ここでの魔法で他選手への妨害になる魔法以外はどんな魔法も使用可能です

101階～300階まではトーナメント予選です

電光掲示板に掲げられた選手同士戦つて1回勝てば1階進めます

300階に到達した人は後日トーナメントに参加する資格をもらえます』

俺：「……これは……でないワケにはいかないでしょう！
そのまえにティライドの所にいかなくちゃ
クライアントお前も来てくれ」

魔法決闘大会

俺：「よつしゃあ」

俺は“ブレイヤー・タワー選手塔”を登る受付をした

そして5分後に登り始めた

ん～・・・

俺：“スピード・アップ速度上昇”

ディライドが言つてたのだが（半分よく分からない）

俺は“ヒラス・ヒヨーマン勇者の五人”だそうだ・・・

俺は勇者だつてサ

その五人だけが使える魔法つていうのも多くて今のもそのひとつ

今俺は常人の10倍くらいの速さで走つている

30分もすれば到着した

次は決闘だ！

魔法決闘大会（2）

実況：「コウタ選手これまで69勝目！ 現在169階です……！」

俺は勝ち進んでいた・・・といつか絶望していた

こんな低レベルなヤツが蔓延っているのだろう

俺も装備を魔法で作ってディライドに教わった

“龍法剣術”を駆使すれば全員弱い弱い

ちなみにクライアントは俺のディライド遭遇大作戦について行って
出会う頃にこの大会に行くつて言つて帰つたんだが・・・もうトーナメント進出決定だらうか

放送：「コウタ選手 次の試合です」

ふう 50回勝つてから俺の個室がもらえた

もちろんルームサービス・ドリンクがもらえる

（10分後）

実況：「コウタ選手70勝目です」

こんな低レベルだとは・・・せめて300階からのトーナメントは手ごたえあって欲しいなあ

魔法決闘大会（2）（後書き）

そろそろ書いている理由といいますか書いておきます

個人的に金土日に書きまくつてみようかと思います

明日は朝から試合があるので遅くなるかも・・・？

魔法決闘大会（3）

はあ・・・楽しくない

おつと次の試合に行かなくては

実況：「次は注目の一戦！ 70連勝中のハウタ選手と6連勝中のフラットライト選手

フラットライト選手は試合に2分とかからず勝ち進んできました

実力は相当高いと思われます」

審判：「・・・はじめ！」

俺：サンダーソード“雷劍”

俺は俺の戦い方がある！

フラットライト：「装備戦闘型か・・・その戦い方は“龍法剣術”だね」

俺：「！！ 知ってるのか」

知ってるならワザとその攻め方をする必要はないが・・・

龍法剣術 攻式1 フェイント

デイライドに教わった攻守合計5つの型で攻める

俺は攻式を2種類ほど使った・・・

フェイントは自分の魔力を一定放出させて自分の幻影を作つて

偽者で攻撃している間に背後から攻撃するといつ方法だ

フェイントフェイントが攻めているうちに俺は遠回りで背後に回る

フラットライト・・・「・・・」

おそらく知つてることだらけ

フェイントと俺が同時攻撃するように時間を設定してある

そして

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5370x/>

異世界に戻ろう

2011年10月29日20時46分発行